ポストコロニアル時代[1]に新たな「研究」と「学び」はいかに可能か

――趙韓恵浄の「自己物語」論を中心に――

福島　みのり

How is new learning and research possible in the postcolonial era?

— Focusing on Chohan haejoang's self-narrative theory —

Minori FUKUSHIMA

はじめに

欧米で社会学を学ぶと「社会学」の専門家となり、韓国で「社会学」を学ぶと「韓国社会の専門家」となる。私は、韓国の若者問題を研究するために韓国に留学したものの、韓国の大学院が最初に求めたのは、欧米の理論をきちんと習得することであった。授業の大部分は欧米の理論書を原文で読み、論点をまとめて発表するスタイルであった。一方、大学院生や教授の多くはセミナーのたびに私に日本の事情について尋ねてきた。私は欧米の理論や日本の事情を学ぶために韓国に留学したのではなかったものの、結局二つの要望を満たすため、欧米の理論を学びながら日韓の若者問題を研究することにした。そして、現在私は日本の大学で韓国社会論や文化論を教えている。

これらのエピソードは、未だに日常の空間から学問の世界に至るまで、欧米の言説と理論が支配体系の頂点に君臨し、私たちの日常や知を支配していることを物語っている。最も深刻な問題は、私たちが自分の社会について語る言葉を十分に持たずにいるという現状である。欧米の理論に照らし合わせて自国の様々な事象を検証する、いわばオリエンタリズムの観点がいまだに権威を振るっている。

二〇年前に韓国で研究していた時、こうした問題を意識しながら研究に取り込むように諭したのがフェミニストであり文化人類学者である趙韓恵浄先生であった。特に印象深かったメッセージは、「研究者は、まず自国の人類学者にならなければならない」という言葉であった。自国の人類学者とは、自分の国の言語で自分

のまわりや社会の様々な出来事を観察し、記録する者といえる。その点で自国の人類学者になるため、誰よりも徹底的に教育や研究の場で実践してきたのが趙韓恵浄であった。本稿では、日本では殆ど知られていない趙韓恵浄の教育実験と研究を紹介しながら、自分の言語や自己物語を持つことの意味を明らかにするとともに、教育や研究の場で未だに根強く影響を及ぼしている植民地性やオリエンタリズムを克服できる道を模索する。

議論を進める前に、まず趙韓恵浄の略歴を紹介する。趙韓恵浄は一九四八年生まれ、延世大学史学科を卒業し、一九七〇年代にアメリカに留学する。当時、韓国で女性として留学、しかもアメリカへの留学は珍しいことであった。アメリカではミズーリ大学やカルフォルニア大学（UCLA）で文化人類学を専門にし、修士、博士号を取得する。一九七八年に帰国し、延世大学社会学科の教授に就任する。フェミニストとして、第三世界の知識人としての問題意識を持ちながら、女性や主婦たちの集まりを作り、大学で様々な授業実験を行う。一九九〇年代から消費社会の到来とともに発生した学校教育問題、いわば学級崩壊や登校拒否の一〇代を目の当たりにし、彼らの居場所と学びの場として代案学校（日本でいうフリースクール）に関心をもちはじめ、一九九九年に一〇代のフリースペースであるハジャセンターを設立する。その後、代案学校を出た若者の進路を考え、やりたいことをしながら食べていける社会的企業を仲間とともに作っていく。同時期に、ソウルの一地域であるソンミサンのまちづくりにも携わり、新たな共同体、代案的な生のありかたを実験し始める。二〇一四年に大学を退職し、現在は済州島で暮らしながら、韓国社会に向けて様々なメッセージを発信をし続けている。主な著書に『脱植民地時代の知識人のテクストの読み方・生の読み方、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ』（一九九二、一九九四、一九九六）、『学校を拒否する子ども、子どもを拒否する社会』（一九九六）、『学校を探す子ども、子どもを探す社会』（二〇〇〇）、共著『教室が戻ってきた』（二〇〇九）、『再びマウルだ』（二〇〇七）などがある。趙韓恵浄は数多くの本を出したが、その根底にあるものは「植民地」から「脱植民地」への実践であり、「自己物語」を描くことである。「格差」「貧困」「分断」などの今日のグローバル社会の危機の最中においても、日韓ともに植民地性とオリエンタリズムの問題は相変わらず重要な課題であるといえる。

本稿は趙韓恵浄の著作をその刊行順に沿い、筆者である私自身の個人の記憶とエピソードを交えながら紹介、または読み直していく。第一章では、「脱植民地性」への問題意識を持ちはじめた趙韓恵浄の留学時代（一九七〇年代）を紹介し、第二章では、学生が自己物語を習得していく学びの過程（一九八〇年代～一九九〇年代半ば）を検討する。第三章では、一〇代と学校教育問題を解決するため設立したハジャセンターでの実験を検討し、第四章では、社会的企業やまちづくりに携わりながら彼女が模索したグローバル危機からの突破口を紹介し、趙韓恵浄の「脱植民地性」を通じた教育・生の実践についてまとめる。

1．趙韓の留学時代 ――コロニアリズムに基づく学問体系の克服（自国の人類学者になること）――

毎年、大手のビックデーター会社が行う世界大学ランキングを

見ると、トップ一〇に入るのは欧米の大学がほとんどであり、続いて欧米の植民地であった香港、インド、シンガポールなどのアジア圏の国々がランクインする。『THE 世界ランキング』（日本語版）をみてみると、主な指標として「教育効果」、「国際性」、「教育リソース」、「教育充実度」などがあげられるが、その背景には世界共通語である英語の威力は無視できない。論文引用ランキングに関しても、英語で書かれた論文が大部分を占める。

毎年非英語圏の若者の多くが欧米の大学や大学院に留学する。第二次世界大戦後における留学先は、ヨーロッパからアメリカの大学へシフトし、東洋と西洋の間における明確な存在論的不平等（サイード、一九九三：上 三四四）がますます強化されている。この前提にあるのは、西洋は「普遍（中心）」であり、東洋は「周辺」、すなわち常に西洋に照らし合わせて解釈される地域であるという見方である。こうしたオリエンタリズムは、私たちの日常空間から学問領域、そして社会システムにいたるまで深く根付いている。

今や東洋人は欧米に普遍的理論を学びに留学し、自国にその理論を持ち帰り、自国を測る尺度として用いる（サイード、一九九三：上 二七七参考）。一方、欧米に留学したアジア人留学生の多くが、欧米の学問分野を研究テーマに設定するよりはむしろ、自国のある現象をテーマに研究を行うケースが少なくない。すなわち、ここには欧米人が東洋人に求める研究テーマと、東洋人が求める研究テーマの不一致がみられる。（この点は、「はじめに」で筆者が言及した留学経験にも共通してみられる。）

趙韓恵浄が留学時代に経験し、気づいた次のエピソードはまさに、教育や研究におけるオリエンタリズムのシステムを的確に示している。趙韓が韓国ではじめて出版した著書は、『韓国の女性と男性』（一九九九、文学と知性社（韓国）／邦訳は『韓国社会とジェンダー』二〇〇二、法政大学出版局）[2/3]であった。本書の元は、博士号取得のために済州島における男女の性別役割についてフィールドワークを行い執筆した論文である。趙韓は、上野千鶴子との往復書簡の中で、アメリカがアジア人に要求する研究テーマで博士論文を執筆した経験について、第三世界出身の人類学者が知識ブローカー以外の役割を果たすことは困難であると指摘する。

> 済州島では、そのころすでに旧式のトイレもなくなり、あらゆる伝統的な生活様式を破壊していた。わたしはそうしたことを目にしながらも、ただわたしが知りたかった「性役割」についての調査に専念し、資料を米国に持ち帰り論文を仕上げた。わたしは米国の人類学会が望むとおりの情報を収集した、調査研究員にすぎなかっただろうか。第三世界出身の人類学者が知識ブローカー以上の役割を果たすのは難しいのだろうか。（上野・趙韓、二〇〇四：二二）

研究テーマというものは、研究者のポジションによって、そしてどこで研究を行うのかによって、その影響力が異なってくる。その点で、趙韓の悩みと葛藤はエドワード・サイードの指摘と共鳴する部分が多いといえる。欧米に留学するオリエント（非西欧人）の人々の中には、アメリカを対象とした研究テーマを選択するケースも数少ない。むしろ、先述した趙韓の経験を含め、アメリカに留学し、自国の社会に基づく研究を行う学生が多くみられる。趙韓いわく、東洋の研究者の「知識ブローカー」としての役割は、二〇二〇年代にもそう変わっていない。やっとの思いで欧

米諸国の大学院で学位を取得したとしても、それらの研究はあくまでも地域研究の一つの成果に過ぎない。趙韓は韓国に帰国し、博士論文を出版する際、本書のタイトル、『韓国の女性と男性』をめぐり、自分自身のポジショナリティと研究成果が、西欧の周辺部に位置付けられていることを実感する。

> タイトルを決めるとき、わたしの頭をかすめたのは、アメリカの人類学者マーガレット・ミードが自分の本に『男性と女性』というタイトルをつけながら、そこに「アメリカの」とつけるべきか否か、ほんの一瞬でも迷っただろうかということでした。まさに、これが「中心部」にいる人間と、そうでない人間の違いでしょうね。（趙韓・上野、二〇〇四：二一－二二）

趙韓の指摘は、依然理論を生産するのは「欧米」であることを物語っている。だが、理論とされる対象も一つの地域であることに変わりはない。マーガレット・ミードの『男性と女性』というタイトルに「アメリカの」をつけることによって、西洋も一つの「地域」として捉えられ、脱領域化するまなざしが生まれるであろう。

一方、趙韓はアメリカで博士号を取得し母国に帰国した後、学生たちが求めるテーマとのギャップに遭遇することになる。以下は、アメリカで書いた教材で韓国の学生たちに人類学を教える中から感じたエピソードである。

> 学生たちは、米国の学生とは違って、部族社会の慣習に関心を示さない。わたしは、この学生たちには好奇心すらないのかと腹を立てた。けれども学生たちは「誰だって文化相対主義くらい知らないわけがないじゃないですか。人はみんな、各人各様に暮らしているんですから」と白けた反応だった。後で分かったが、学生たちがぜひとも知りたかったのは、自分たちが追いつき追い越さなければならない「先進社会」の人々の生活であったのだ。（趙韓・上野：二二－二三）

そこで、趙韓は「これまで人類学者が生産してきた知識はいったい誰のためのものなのか。そして、人類学は『普遍的知識』を生産する学問だといえるのだろうか」（趙韓・上野：二三）と問わざるをえなくなったのである。自分がアメリカで学んできた人類学、ひいてはアメリカの大学で生産されてきた理論、知識の意味と価値が根底から揺らぎ、「誰もが納得する普遍的知識の生産はいったい可能なのか」と問い続ける。この問いは、先に言及した博士論文を執筆していた時期の自己省察につながる。この経験を通じて、趙韓は学生たちに「自国の人類学者」になることを提案する。

> わたしは、帝国主義国家出身の人類学者も、人類学者の通過儀礼である異邦社会の現場調査を終えたなら、自国に帰り、そこで獲得した視点で自国を研究しなければならないと思う。自分の国を「総体的に」研究する経験もなく、他の国ばかり、それも上から見下すように研究するなら、人類学はこれまで自らが最も厳しく批判してきた「自民族中心性」を抜け出す道はない。人類学は異邦社会に対する好奇心に満ちたロマンティストの趣味活動ではない。人類学者は自国の問題を解決するための切実な手掛かりをもって旅立つ者でなければならないし、こうした面で人類学者とは、結局はすべてが自国の人類学者でなければならないのだ。（趙韓・上野：二三）

こうした趙韓の指摘は、他者や異文化理解について、まず自分の国と社会を相対的に見つめ直すことを通じてのみ可能であることを教えてくれる。この点は、「地域研究」という枠組みのみにこ

だわることからくる落とし穴でもある。これまでの地域研究は、政治学・社会学・文化理論・言語学など欧米の理論に照らし合わせて特定の地域を研究するという方法がなされてきた。こうした視点は、欧米は「普遍」であり、韓国などの地域は「特殊」であるという前提に立ったものであり、「何が韓国社会の特殊性なのか」「何が欧米（日本）との違いなのか」という視点が支配的であった。この点に関しては、欧米との比較のみならず、日韓の差異についての議論も同様であった。これまで日韓の差異については、「対立」という図式を通じて、浅はかな「国民性」論議がなされ、こうした差異に対する単純な認識は、安易に「本質的なアイデンティティ」への議論につながり、相手を規定し他者化してきたのである（上野・趙韓：一九七－一九八）。重要なのは、「ある社会がどれだけ自国の社会問題＝課題を提起する力を備えているのか」であり、そこに目を向け、その力を有する社会こそ自然と理論が獲得できると趙韓は指摘する（趙韓、一九九一）。すなわち、表面的な比較による特殊性のみに注目するのではなく、ある社会の課題とその取り組みに目を向け、そこから自分の所属する社会との共通の課題を導き出すことによって理論を獲得することができるのである。

「欧米から与えられた言葉（理論）」で私たちが所属する社会を語るのではなく、私たちの言葉で、私たちの社会について語るにはどのようにすれば可能なのか。第二章では趙韓の大学での実験を検討する。

2．「脱植民地時代における学び」の実験

アメリカで博士号をとり、母校である延世大学に赴任した趙韓は、脱植民地への道、つまり自分の言葉を持ち、自分の社会について語ることを授業の中で実験することにした。はじめからこの授業の内容、授業の中で行ったことは、人類学者の観察に基づいたエスノグラフィーとして本を出すつもりであった。自分の言葉を持つという実験は、教育の場と研究の場を一つにすることから始まるからである。こうして『脱植民地時代の知識人の、テクストの読み方・生の読み方―今この教室で』（もう一つの文化、一九九二、以下、『今この教室で』に省略）という本が出版され、当時韓国の大学や知識人に大きな衝撃を与えた。以下、この本の内容を踏まえつつ、この時期の趙韓の実践を検討する。

一九九一年の春学期に延世大学社会学科の三、四年生を対象とする専攻選択科目『文化理論』について、趙韓は次のように授業の目的と意味を語った。

> 本授業は、「植民地知識人の服」を脱ぎ、「教え」と「学び」に関する「教育（pedagogy）」への実践であり、「誰かに何かを学ぶ」という考えより、「自己省察のための討論に参加する姿勢」を通して積極的に読書をしてほしいという目的があった。（趙韓、一九九二：六－七）

『今この教室で』には、本授業の内容や方法のみならず、学びの方向性や共に学ぶことの重要性も書かれている。ここではその一部を紹介する（趙韓、一九九二：二八－三三）。

A：シラバス

第1章：馴染まない言葉／空回りする生

欧米の理論ではなく、韓国（つまり、私たち）の言葉で書かれた論文や文学作品、映画など芸術的なテクストを使用する。これまでただ傍観していた社会現象をキャッチしてきたことに対し、本授業では新たに読み解く習慣をもち、これまでの文化的圧力から抜け出すことができる知恵と力を伸ばすことができれば、講義の目標が達成されたことになる。

B：教室の運営方式

一．共に作り上げていく教室にする。教授が教壇から一方的に話して教えることは、無条件に耐えるべきだという相当な忍耐力と沈黙を強要する行為である。教壇に立つということは、事実上、教授は相当な権威として君臨する。この授業は討論中心に行うため、教壇は必要ない。

二．授業は「討論の共同体」である。自発的に参加し、互いに正直になり、忠実に努力するよう心がけること。

三．なお、大学生のあり方として、出席はとらない。授業を欠席したら、損をするというモットーで授業に臨むこと。討論内容は、授業後に提出するレポートに反映させること。

趙韓は、「小説、文化批評書、学術書、写真、映画など様々なテクストを毎回学生たちに紹介し、自分自身の生と関連づけ、積極的かつ創造的に読み解くこと」を促した。だが、授業が始まると学生は「模範生」からなかなか抜け出すことができなかった。そこには、趙韓が常に問題視してきた「受験中心の教育が作り出した若者の姿」があった。初回の授業にて、グループごとに自己紹介をするように伝えたところ、学生たちは「模範生」のように、趙韓が例えとして提示した「高校時代の思い出」、「家族について」、「好きな音楽や映画」などすべてを語ろうとした。それはまるで、「自己を抑圧する主体」であるかのような振る舞いであり、ある意味自分の生と乖離した姿勢でもあった。だが、この自己紹介からは学生たちの「自分を理解してほしいという強い欲求」を感じるようになり、学生自身も授業に対し積極的になっていったと趙韓は評価する。

趙韓の行った授業の具体的な様子を少し紹介する。一九九一年の春学期に行われた授業『文化理論』は、「馴染まない言葉」、「空回りする生からの脱却」という二つの言葉に収斂される。この目標に近づくために、趙韓は欧米の理論ではなく、韓国（私たち）の言葉で書かれた文学作品、批評文、映画や写真など芸術的なテクストを用いた。最初に扱ったのが韓国の小説家イ・インソンの作品だった。当時韓国人に馴染みがある欧米の多くの文学作品は、「成長物語」に代表される啓蒙思想をもち、自己の内面を成長させ、自己を克服していくストーリーが主流であった反面、彼の小説（短編「あなたについて」、一九八五）は、従来の文学作品には見られない特徴を備えていた。小説の最初と最後を引用する。

まず、この小説を読むあなたに、しばらく目を閉じてもらいたい。目を閉じていないなら、お願いだからじっと目を閉じてほしい。きっとあなたは目を閉じてなかった、または早めに目を開いてしまった。そのため、この瞬間突然、「おお、気が短いクソ読者よ！　畜生！」という激辛の悪口であなたに罵声を浴びせても構わないのだ。だが、僕はできればそうしたくない。あなたに、あなたについて話すため、あなたを無条件擁護しなくてはならないのだ。すまない。あなたに不愉快を与えたとしたら、正直言ってこんな時代を共に生きながら、今ここではなくとも、あなたに衝撃を与えたい私の気持ちが「いつか」は理解してもらいたいんだ。そうだ！　この「いつか」に向かってこの小説は始まっている。（中略）これまでこの小説を読んでから、あなたは、以前のあなたと紙一重ほど変わったのか。今のあなたは僕の次の小説を読もうとするのか。

（趙韓、一九九二：四〇－四一から再引用）

本作品を読み、感想文を書いてもらったが、趙韓の注文は、「この小説を読んだ後に自分が感じたことを素直に書いてほしい」というたった一つであった。多くの学生は、「これが小説なのか」という戸惑いを隠せなかった。さらに、彼らには「分析しようとする」習慣がみられた。「イ・インソンの文は十分に啓蒙主義的でない」「明確な代案を提示していない」「個人的に成長する中で自分にとって真正な意味を与えるのではなく、形式的かつ見栄っ張りのように感じる。実践的な代案に失敗したようだ」「現実に対して絶望し、虚しさを消せないようだ」など批判的なコメントが多くみられた。趙韓は、これら学生のコメントを読み、「学生たちは、小説とは普遍かつ妥当な心理を描かれなければならない。すなわち客観的な真実があるという前提として捉え、見慣れない事柄を自分と結びつけることに躊躇する傾向が見られる」と指摘した（趙韓、一九九二：五二）。趙韓は、「この小説には結論はないが、自分を見つめ直すきっかけになる」、すなわち正解がない小説を意図的に選んで授業を行い、その点を気づかせることを目的として実験したのであった。

趙韓は、この授業では総括以外、教壇に上がらなかった。討論がうまくいったわけではないが、彼らの書いたレポートはすばらしく、回を重ねるごとに文章が上手になった。特に、討論は自分の話と関連した話ができたときに活発化し、結果、レポートのレベルも上がったという。

学期終了後、参加学生の殆どは文化について、自分の生について、自己省察する機会をもち、各自、自らの生について新たな悩みを抱くようになった。この授業はそれなりに成功し、これまでの文化理論の講義にはなかった実践であった。学習スタイルを革命的に変えるべきだという考えは正しかったと趙韓は評価する（趙韓、一九九二：二八－三三）。

趙韓が意図した学びへの実践とは何であったのか。彼女はある学生が述べた「この小説は、作家が意図した内容を一方的に伝達するのではなく、日常的な話をお互い問い続け、応答する形式を通じて現実を認識させてくれるようだ（八六年度入学、チャンホ）」という意見に注目する。その理由として、イ・インソンの小説は、作家という視点ではなく、虚無的な存在でしかない自分の姿を見せようとしたからである。かつて誰もが類似したライフコースを歩んだ「大きな物語」かつドラマに出てくる他人の人生の喜びと悲しみを通じて自分の人生を確認した時代とは異なり、自分は誰なのかを模索しつづければならない時代である。小説とは、互いを結ぶ「ひも」を容易に見いだせない状況の中で、小説家として生き残るために必死に書いた小説家の実践でもある。趙韓は、「私が今や統合された一つではなく、『私』が誰なのか、分からない時代を生きる読者にとって、イ・インソンは『出会い』と『言葉』を放棄してはいけないと語り、私たちの中に入らない限り、得られないその何かがあることを感じる文章に、私（趙韓）は喜びを感じる」と語る（趙韓、一九九二：五五）。趙韓は、翻訳ではない「私たちの言葉」で書かれた小説を読む実践を通じて、私たちの言葉を読む喜びを知り、自己省察をする実践を行ったのである。重要なことは、この地（韓国）に住む一人の小説家として、彼が切実にこの文章を書いたという事実であり、より重要なことは、この教室の学生たちがその文章を読み、多くの大切な話を分かち合

うことができたという事実であった（趙韓、一九九二：五八）。

「教科書的な読解と受動的な人間、著者の権威と権力、知的共同体の形成とその潜在力について、そして「我々」の言葉が究極的に最も重要かつ権威のあるものであり、よって今この場における出会いがまさにそれ（重要）なのである。」（趙韓、一九九二：五八）

この指摘は筆者の私に新たな視点を与えてくれた。先述したように、留学に行った際、筆者は海外にのみ目を向け、いかに日本のことを知らなかったのかを思い知らされた。「自国の人類学者になることで、他者を知ることができる」という趙韓の言葉によって、「学び」とは「対象」のみでなく、自己の「ポジショナリティ」との関連で形成されるものであることを学んだのである。

3．新たな教育の場を作る―代案教育の場「ハジャセンター」設立

一九九〇年代後半になると、趙韓は大学で実践した「脱植民地化の実験と学び」に基づき、学校外で放浪しつづける一〇代の青少年のための「代案教育の場」を作り上げていくことになる。両者に共通する点は、圧縮された近代化の中で「従順な身体」に飼いならされた若者を解放させ、自らの身体と言葉を取り戻すことであった。韓国は一九六〇～一九八〇年代半ばまで軍事独裁政権を経験し、一九八七年に民主化され、一九九〇年代のはじめにようやく消費社会を迎えた。圧縮的かつ抑圧的な近代化により、長らく学校現場で規律訓練に飼いならされてきた若者は、学校外の消費文化に触れていく中で徐々に「消費者」としてのアイデンティティを持つようになった。市民が中流意識をもちはじめ、ライフスタイルが多様化していく中で登場した新しい「世代」は、個人指向で新しい価値観を追求する世代として注目されていった。一方で、「一九世紀の学校で二〇世紀の教師が二一世紀の学生を教えている」と揶揄されるほど国の統制下で長らく画一的であった教育現場では、不登校、学級崩壊など「動機付けの危機」に陥った一〇代の青少年問題が浮上していった。

子どもたちが家にいない
夜一一時が過ぎたのに、子どもたちは家にいない
学校で「強制的に学習」させられ、塾で宿題や予習をした
自習室に行ったという
自習室にいくと言い訳をし、
近くの卓球場に
華陽洞ナイトに行ったという
ピピと呼ばれる無線呼び出し機にしがみついて
体は（ここに）あっても
心はどこかにいってしまっている
（『学校を拒否する子ども、子どもを拒否する社会
――受験文化の政治経済学』もう一つの文化、一九九六：四）

もはや学校は「羨望の対象」ではなく「抑圧の象徴」となり、自ら逸脱していく子供たちが徐々に現れはじめ、受験中心の教育と暗記式教育、そして権威主義的な学校が子供たちの想像力と自発性を押し殺すという考えも徐々に広がりはじめていったのである（趙韓ほか、二〇〇二：九四―九五）。

そのような状況の中で、高校を中退し歌手となったソ・テジ[3]は「学校に行かなくても上手くやっていける」というメッセージを社

会に送り、一〇代の絶大な支持を得、その後、様々なカウンターカルチャーが若者に浸透し、韓国特有の「若者論」も生産されていった。

ところが、民主化されてから一〇年ほど経った時期に起きたＩＭＦ経済危機によって、韓国社会は大きな困難に直面する。既存の社会システムが機能不全に陥り、就職難は言うまでもなく、リストラにより家庭の崩壊が続出した。中でも、大きな困難に直面したのは一〇代の青少年たちであり、学校では学級崩壊や家出少年、少女があとを絶たなかった。「学校にいても心は学校にない若者」「無気力な青少年」が増え続け、一日中学校に閉じこもっている一〇代は、心身ともに疲労困憊でストレスが限界に達していた。こうした状況は、脱学校・いじめ、そして自殺などの増加にもつながっていった。

当時の韓国社会の状況や時代の流れを察した趙韓は、「一〇代は『問題』ではなく『社会的資源である』」というスローガンを掲げ、一九九九年、延世大学がソウル市から委託を受け運営する形で、都市型フリースクールであり、ユーススペースである「ハジャセンター」を設立した。「ハジャ」とは「やってみよう！」「いろんなことに挑戦してみよう！」を意味し、設立のキーワードは「ソ・テジ」と「ＩＭＦ」であった。「ソ・テジ」は「学校に行かなくても社会で上手くやっていける」というメッセージであり、「ＩＭＦ」とは既存の社会システムの崩壊を意味した。特に、大衆文化の領域で活動していた人文系出身の若者が受けた衝撃は多大なものであり、文化産業界に従事できる新たな人材を育てることを目的とし、既存の学校教育とは全く異なった若者の創意的な空間を設立したのである。

開校に先立ち、「Why are we discussing ‘youth’ now? Youth and Modernity –From Youth Problem to Youth Question–」と題した「設立記念シンポジウム（一九九九）」は、若者の現状を「問題視」するのではなく「なぜ」という問いを発信した。基調講演を行った『ハマータウンの野郎ども』（一九七七＝一九八五）の著者であるポール・ウィリスは、階級社会であるイギリスの場合、労働者階級の若者、いわば「野郎ども」は抑圧的な学校空間から抜け出すために、むしろ自発的に低賃金の肉体労働を選択し、結果的に現存する社会秩序の再生産に寄与する結果を生み出すアイロニーを指摘した。これに対し、趙韓は韓国における「脱学校の若者」[4]は社会システムに不適応な若者ではなく、社会システムが原因となって出てきた副作用であり、その点で彼らは「時代の表徴」であると指摘した（趙韓、二〇〇二）。両者に共通しているのは、若者の問題が「個人の問題」以上に「構造上の問題」であり、時代の流れと深く関連していた点である。趙韓は不登校の子供たちが「不良」と言われることに違和感を感じていた。

> 私の出会った子供たちは、みんなやる気でいっぱい。ふつうの学校は古いから、それがもう身の丈に合わないのだろうと感じた。そこで、文化・芸術・ＩＴ・ものづくりなどを外部の専門家や市民団体と一緒になって学んでいく新しいタイプの学校としてハジャセンターをスタートさせた。（趙韓、二〇〇〇）

ハジャセンターは、都市を教育資源と教育空間として積極的に活用し、「学び」と「遊び」と「仕事」を共に考える未来型の教育空間であった。長年にわたる民主化運動は多様な市民運動をも

たらしたが、こうした代案教育の現場はその市民運動がもたらした一つの特徴であり、主に体験学習、プロジェクト学習など教科書的な知識を学ぶことから脱却し、全人的かつ共同体的な体験を中心にした場所であった（福島、二〇一四：七一－七二）[5]。「脱学校」の若者たちは学校的価値観に、「NO！」を突き付け、「自分が何をしたいのか、何をしたくないのか」を明確に捉え、行動に移す主体的な若者であった。ハジャセンターの活動モットーは「自らアップグレードしよう」、「具体的な経験と作業を通じて学ぶ」、「問題解決とコミュニケーションを学ぼう」、「情報を積極的に共有し、経験を情報として発信しよう」、「ネーミングできる人になろう」であった。特に印象的なのは、ハジャセンターに通う若者とスタッフ[6]はお互に本名ではなく「ニックネーム」で呼び合うことであった。自分の名前を自らがネーミングすることで主体的な行動力を身に付けることはもちろんのこと、従来の教員と学生といった上下関係がなくなり、同じ目線から伝えたいことを伝える水平的な関係性を構築することができるのである。

趙韓は何よりも「頭ではなく、体を使った学び」「知識と経験を融合すること」を強調し、教科中心の学習よりもプロジェクト学習、参与観察やインタビューなどフィールドワークの重要性を説いた。趙韓はハジャセンター設立後、一年経過した時期に執筆した『学校を探す子ども、子どもを探す社会』（二〇〇〇）の冒頭に、以下のような文を書いた。

ソ・テジが戻ってきた。
「家に帰りたいと思います。そして、私の家がどこか、考えてみます」という手紙を送った。
タルゲンイも戻ってきた。
（『学校を探す子ども、子どもを探す社会』（二〇〇〇）より）

「私の家はどこか」は、まさにハジャセンターを意味していると いえる。趙韓は『学校を拒否する子ども、子どもを拒否する社会』（一九九六）の中で、彼らが学校教育システムに不適応な若者ではなく、システムの副作用によって病んでいる「時代的な表徴」として捉えた。一方、四年後に執筆した『学校を探す子ども、子どもを探す社会』（二〇〇〇）では、「たった今突入した後期近代的な状況の中で、彼らとともに時代の危機を解決すべき、代案を模索すべきである」と指摘する。「脱学校」した若者は、不良でも体制に不適応な若者でもなく、危機の時代を共に突破していく仲間であり、主役であることを読み取ったのである。ハジャセンターは後期近代の様々な問題を乗り越える代案を模索する場所であった。巨大なベルトコンベアが象徴する「大量生産体制」の時代は過ぎ去り、「多品種・少量生産」の時代となり、消費の時代、文化の時代、インターネット革命の時代となった。「新世代」に象徴される一〇代の若者は、消費・情報文化の時代を生き、それぞれの個性を生かした文化の担い手となったのである。彼らが探し続けた「居場所＝家」がまさにハジャセンターであった。ソ・テジは「Come Back Home」を歌い、家出をした若者も徐々に家に帰ってきた。

以下は、ハジャセンターを誰よりも求めていた一〇代による「私にとってハジャとは？」のエピソードである。

一人で何かをしていた私が、共に活動しなければならない音楽に接した。

バンドの歌を聴きながらバンドがさまざまな人たちとなされるものであり、協働が必要な音楽であることも知らなかった私は、音楽作業場[7]で初めて「協奏」というものを学んだ。（ユン、音楽作業場二期）

私にとって「読書会」は、本当の自分の姿を探していく過程であった。親が与えてくれた名前ではない「スピリット」として行動し、考えながら、広い野原を飛び回るアニメーションの主人公の馬になった気がした。他の人とただ話をするだけでも、自分を見つけることができる。私にとって楽しくもあり神秘な経験であった。（スピリット、読書会の集まり）

「私にとってハジャとは」（https://haja.net/about より）

「主体的に学ぶこと」、そして「他者と協働すること」が一〇代の若者にとって人生の大きな糧となっている。「代案教育運動のもたらしたこと」について、ハジャセンターのホームページには次のように記載されている。

・既存の教科書的な知識ではなく、生活空間のあらゆるところに存在する知識、答えを探す知識ではなく、問題を提起する知識、頭でのみ考える知識ではなく、身で切り開く知識の重要性。
・時間割と学校という物理的な時間と空間から自由な教育を通じて、子どもたちの自発性、創造性を育てることの重要性。
・既存の社会、既成の世代、主流の秩序から自由であること、自由な価値観のみが、将来の社会問題を解決できるということ。

（「ハジャセンター」のホームページより）

ハジャセンターでは、学校空間を超えた知識のあり方、自由な発想と創造性を育てること、そして、主流の価値観から距離をおき、自由な価値観をもつことが、今後の人生を歩んでいく上で直面するさまざまな問題を解決に導き、豊かな人生を送ることができるだろう。ハジャセンターを設立し、運営に携わっていた趙韓は、新しい時代に相応しい教育空間を造っただけではなく、その空間で若者が行った多様な実験を観察、記録し、一つのエスノグラフィとして『学校を探す子ども、子どもを探す社会』という本にまとめた。まさに、これこそ自ら「自国の人類学者」になることを実践したといえる。

4．自分で仕事をつくる社会的企業の立ち上げ

人生の道探しが困難になった今の時代、落胆する若者を見るたびにノリダンで人生の歩み方を得た子供たちと若者は幸運だと思うようになりました。人生と遊び、そして仕事と学びが調和したノリダンの知恵を込めた本書がこの時代を越える小さな希望を伝えられれば幸いです。（趙韓恵浄）

大人に会うと話すことは決まっている。不動産と財テク、そして子どもの教育問題。話の中心はお金であり、根底にあるのは不安である。不安という空気は周囲を容易く汚染させるため、大人の不安はまさに子供たちのものにもなってしまう……だが、ノリダンと幼稚園の間を行き来しながら私の話題が変わった。そして、私だけの航路を作りはじめた。不安と恐れを伝える大人ではない、きちんと責任がとれる大人が何なのか私も知らぬ間に学んだ。（ハ・ジョンヒ／京仁女子大学教授）

（『ミンドゥルレ』出版ホームページより）

「せっかく古い体制から脱出した子どもたちが、いざ就職となると『競争社会』に再び戻されてしまう。もっと代案的な進路を自ら作り出せないのか」、そして「不安や恐れ、お金に執着するのでなく、やりたいことをしながらも責任がとれる若者を育てる」にはどのような道があるのか。

ハジャセンターを卒業した若者たちが、その後の進路として彼

らの特性を活かしながら食べていける道を模索する中でヒントとなったのが、オーストラリアのパフォーマンスグループ「Hubbub Music」であった。ノリダンは、ケアのマインドを持った多様なバックグランドをもった芸術家と、ハジャセンターで学んだ一〇代の若者と共に作られた自己雇用の共同プロジェクトであった（『仕事をしながら遊ぶ、そして学ぶ』、一二頁）。二〇〇四年以降、一一人のメンバーがオーストラリアで学び、芸術創作グールプ「ノリダン」はスタートした。

「仕事と遊びの境界線をはじめ、あらゆる境界を越えていく」「共同生活をしながらともに遊び、教え合い、技術を身に付ける」「（廃材など）捨てられたものに再び命を」「好きなことをして世界を変えよう」をモットーに掲げ、「ノリダン」は「ハジャセンター」の職業訓練の一つの場となっていった。ハジャセンターが開校して五年目に入った当時、すでにハジャセンターで学んだ若者らが主体となって代案的な働き方を模索していったのである。

「ノリダン」とは韓国語で「遊び団」を意味し、一〇代から六〇代に至るまで、外国人も含め多様なメンバーによって構成されている。年間二〇〇回を超える公演や路上パフォーマンスなどを行い、ニューヨークや香港など海外公演も行っている。その根底にあるものは「好きなことをしながら世界を変えよう」という理念であった。若者雇用や環境問題、地域再生など今の韓国社会の抱えている緊急課題に挑戦するノリダンは、社会的企業の一つとしても注目を集めた。近代的な価値観では、「勉強」と「遊び」、「仕事」と「余暇」、「学び」と「教え」、「学生」と「教師」などそれぞれを分けて捉えられてきた。だが、ノリダンは「遊び」と「学び」、そして「仕事」が一人の人生の中で無理なく調和可能な仕組みを作り上げていった。

なお、団員には三つの約束がある。一：「自分の表情に責任を持とう」、二：「資格を自ら証明しよう」、三：「コミュニケーションを演出しよう」である。二の「資格を証明しよう」は「自分が今後できることをただ並べるのではなく、自分がこれまで行ってきた一、二つの仕事の内容をきちんと説明できる能力」を指す。そして、三の「コミュニケーションを演出しよう」は「方向性（direction）を定め、何かを作り出し（production）、それを表現する（presentation）一連の作業」を意味する。これまでの「自己物語」をいかに語ることができるかがポイントといえる。

趙韓は、「やりたいことをしながら食べて生きていこう」という自己主導型学習をモットーに、「人生のベースになれる学びの場」として「ノリダン」を考案した。その背景として、二〇〇〇年以降当時の子どもたちの多くは「無気力」状態に陥り、「時間を守る」という基本的なこともできない状態におかれていた。親の過干渉、もしくは育児放棄により、「何もできない」「何もしたくない」という子どもがあらわれはじめたのである。欧米や日本を含む後期近代社会、消費社会でよく現れる「若者のモチベーションの危機」である。こうした背景から、公演・教育・制作の多方面からのチームワークを通して、体と心と知的能力を訓練する統合プロセスとして「ノリダン」が誕生したといえる。音楽があり、作業があり、隣人と「祭り」を楽しむ場としての「二一世紀の新しいマウル（＝まち）」が誕生したといえる。「ノリダン」は、文化作業場で若者一人ひとりが根気強くケアの関係を築いていく代

案学校として、また老若男女と多文化のグローバル市民が一つの場所に集まって作ったネットワークの中で、共に生活する生涯学習型のマウル学校に徐々に進化していった。趙韓は、この変化していく過程が今日の新しい教育現場が経験しなければならないプロセスだと語った（『ノリダン』、九―一一頁）。

先にも少し触れたが、「ノリダン」の設立されたもう一つの背景には、一九九七年のＩＭＦ経済危機以降の大量失業、非正規雇用の増加がある。こうした問題を解決するため韓国では二〇〇六年に「社会的企業育成法」が制定された。社会的企業の中には、若者問題解決のモデルとして期待される企業も見られ、その代表例が「ノリダン」であった。「ノリダン」を筆頭として、ハジャセンターは「学び」「遊び」「仕事」を実践する社会的企業を徐々に増やしていった。例として、「トラベラーズマップ」、「エコウェディング」、「ヤングシェフ」などがあげられる。「トラベラーズマップ」の背景には、これまでの旅行が海外資本・大手企業にお金が落ちる仕組みであり、旅行先にはその利益が還元されない、むしろ環境が破壊される構造であった。そこで、地元に利益が還元されることは勿論、地元住民が持っている才能を活かし、旅行する人と旅行先の人々が触れ合う仕組みを「トラベラーズマップ」は考案したのである。こうしたアイデアは、地域住民が営む民宿を利用し、環境を考えて自転車やトレッキングを行うなど地域活性化にもつながっている。「エコウェディング」は、大量のごみを出す結婚式を環境に配慮したものにするために、ドレスはトウモロコシのでんぷん、イグサなどでつくり、食事は有機農業の菜食バイキング、ブーケは根っこ付きを利用し、結婚式が終わってからも土に活けられるようにするなどの工夫がされている。「ヤングシェフ」は、移民や障害者、施設で育った若者など、社会的・経済的な資源が少ない若者に料理のスキルを身に付けることで自立をめざす。これら社会的企業に共通している点は、「環境の保護」と「若者の自立」といえる。

二〇一六年、筆者の指導学生が半年間韓国に留学した際に、社会的企業でフィールドワークをする課題を出した。彼女はハジャセンター関連の社会的企業の中の、「ヤングシェフスクール」でフィールドワークを行った。シェフを招いた調理実習では料理の技術を学ぶだけでなく、料理の感性を磨くための芸術、バンド活動、さらには知識や技術を実戦的に学ぶマーケットやキャンプなど多様であり、こうした学びや経験から卒業後の進路も多様化されていると語る。「夜食」をテーマにした試食会に審査員として参加した彼女のエピソードが興味深い。

> 料理は見た目や味だけでなく、その料理を作るに至った過程が実に興味深いものだった。特に印象に残っているのが、夜遅くまで勉強する友人に向け、夜でもカロリーや塩分を気にせず食べることができる「卵スープ」である。友人を思う優しさが料理にも反映されていた。私はこの時、料理を作るに至った動機こそが、お腹を満たすだけではない料理のもう一つの意味を作り出すと感じた。（大学三年、Ａさん）

大学院生だったころの筆者が、趙韓から常々言われてきた「体を使って学ぶ」というフィールドワークの重要性を、次世代の教え子が韓国留学を通じて「自分の言葉でその体験を語った」ことをうれしく感じた。重要な点は、料理を作ることだけでなく、料理を通じた「関係性の構築」である。現地での「経験」が新しい

「知識」を生み出すきっかけにつながり、それが新たな「学び」につながるということをあらためて実感したのである。長年趙韓が主張していた「植民地性からの脱却」と「自己物語を持つこと」が、社会的企業を通じてようやく実現に向かっていることを実感した。

5．持続可能な生にもとづくまちづくり

趙韓恵浄は、著書『懐かしいマウルを、リスク社会から生き延びる』（二〇〇七）の中で、この二〇年間、代案教育の現場で出会った若者たち、すなわち「『脱線』した人々と過ごした時間がとても楽しかった」と語る。今日、無気力になり、「親に服従して生きるのが楽」という一〇代の若者が増え続けている。その背景に共通してみられるのは、人生の「ロールモデルがない」ことである。お年寄りが子どもと過ごすときに幸せを感じるように、一〇代も安定したサポーターとともに大人と一緒にいるときに幸せを感じる。二〇年前のキーワードが、「一〇代」「大衆文化」「消費社会」「代案教育」であったならば、昨今は「高失業・不安定雇用」「雇用なき成長」「リスク社会」へと将来の展望が見えない時代へと移行しつつある。今日の時代には「生涯教育」「社会的企業」「持続可能な生」が重要なキーワードであるといえる。

その点で、ハジャセンターをはじめとした代案学校での学びは、代案的な働き方と並行し、代案的なライフスタイルをも生み出していった。ハジャセンター、そしてノリダンが、都市を積極的に教育資源と空間として活用し、学びと遊び、そして仕事を共に考える未来型教育空間を切り開いていったならば、二〇〇四年に設立された趙韓のもう一つの実験である「ソンミサンマウル」は、都市のなかでどのようにマウル＝まちを活かすことができるのかを考え、ソンミサン学校、小さな木のカフェ、生活協同組合、マウル劇場などを結び付けるターミナルを作っていった。今日までつづく代案教育運動は、教育の問題にとどまらず、都市の再生、持続可能な生、学びと働くことの統合など、後期近代的な生に対する実践を含めた運動を展開していったのである（福島、二〇一四：七二）。

筆者は、韓国に行くたびに「ソンミサンマウル」を訪れる。趙韓恵浄が設立に関わった代案学校であり、親しい韓国の友人がソンミサン学校の教師であり、彼女の家に滞在するのが慣例となっているからである。韓国に行くたびに、また滞在していいのか心配になるものの、彼女はいつでも歓迎してくれる。そして、ソンミサン学校に行くたびに、近くのカフェ「パプサン（お膳）」で有機野菜のみで作ったビビンバを食べる。学校の近くには「小さな木のカフェ」があり、障害を持つ少年が誰にも負けない味の「オミジャ茶」を作ってくれる。学校の屋上では常に野菜を育てており、地下にはイベント用の大きなステージがあり、学生たちはそこで仲間たちと対話をしたりくつろいだりする。教室には可動式の机があり、自由自在に教室の空間を設定できる。教員室にいくといつも笑顔で迎えてくれる。この居心地のよさは何なのか。それは「開かれた関係」であり「開かれた学び」ゆえなのではないか。何よりも、彼らは何の躊躇もせずにきちんと自分の意見を伝える。私が相手にきちんと意見を伝えられなかったとき、翌日は心が重くなるものの、彼らはいつものとおり私を受け入れてくれる。

筆者は、留学時代から現在にいたるまで、趙韓恵浄の実践を通じて、不安定かつ先行きの見えない時代に必要なことは、お金や家ではなく、「依存した関係性」や「上下関係」でもなく、「公平な関係性」と「自律」に基づく「学びの共同体」であることにあらためて気づいた。趙韓恵浄のいう「日常」「学校」「職場」「思考」における四つの学びの実践は、「脱植民地化」を意味すると同時に、「ある社会がどれだけその社会の問題を提起する力を備えているのか、その力を有する社会が自然と理論を獲得できる」ことを証明したといえるのではないか。最後に、趙韓恵浄の詩で締めくくりたい。

私たちは今静かに立ち止まって、
省察する時間が必要である
私たちは一人で過ごす時間
他人と関係を築く時間
創造的な仕事をする時間
楽しさを主体的に楽しむ時間
何も生産せずに
ただ筋肉と感覚を動かす時間が必要である
そして、友人とともに
私が暮らしたい世の中を思い浮かべ
企画する時間が必要である

（『マウルへの想像力』もう一つの文化、二〇〇七：一二五－一二六）

注

（1）趙韓が実際に使った言葉は『脱植民地』であり、本文ではこの言葉を使うようにした。なぜなら、趙韓が植民地から抜け出すことを強調したためである。だが、本稿のタイトルでは日本の多くの研究者が普段使う『ポストコロニアル』とした。

（2）この本には著者の名前が「趙恵貞」と記載されている。これが本名であり、「趙韓恵浄」という名前は一九九〇年代後半から使用するようになった。「趙」は父親、「韓」は母親の姓である。もともと韓国では、子どもは「父親の姓」を名乗ることが一般的であったが、この時期、韓国のフェミニズム運動の中から母親の姓も入れてネーミングする運動が展開された。名前に入っている「貞」と「浄」は韓国語では同じ発音（ジョン）だが、前者が従来の女性らしさを表す漢字であるため、「浄」に変えたといわれている。

（3）日本ではあまり知られていないが、ソ・テジは一九九〇年代に韓国では大衆文化のアイコンであり、文化大統領と呼ばれたアイドルだった。現在世界的に注目を集めているK-popの源泉とも言える存在である。

（4）日本で言う不登校をこの時期の韓国では「脱学校」と呼ばれたが、学校教育の拒否、学校からの脱出という積極的な意味が込められた言葉である。

（5）ガンジー学校のように平和・生命・エコロジーなどの理念と哲学に基づく学校をはじめ、公教育に病んだ子どもたちを治癒する学校も設立された。

（6）ハジャセンターでは、若者と彼らの学びをサポートするスタッフを韓国語で「パンドル」、若者を「ジュクドル」と呼び、「先生」、「学生」という言葉は一切使っていない。学校教育のシステムの言説から脱脚するためである。

（7）ハジャセンターには自分の関心に従って参加できる専門のプロジェクトを行ういくつかのラボ（laboratory）があり、「作業場」と呼ぶ。ハジャセンターで行う殆どは、「勉強」や「学習」より、「作業」である。

主要参考文献

（韓国語）
趙恵浄（一九九二）『ポストコロニアル時代、知識人の文の読み方・生の読み方』もう一つの文化

趙韓恵浄（一九九六）『学校を拒否する子ども、子どもを拒否する社会』もう一つの文化
趙韓恵浄（二〇〇〇）『学校を探す子ども、子どもを探す社会』もう一つの文化
趙韓恵浄・ヤン・ソニョン・ソ・ドンジン編（二〇〇二）『なぜ今、青少年？ハジャセンターが設立されるまで』もう一つの文化
趙韓恵浄（二〇〇七）『懐かしいマウルーリスク社会を生き抜く知恵』もう一つの文化
キム・ジョンフィ編（二〇〇七）『働きながら遊ぶ、学ぶ』ミンドゥルレ
趙韓恵浄（二〇〇九）『教室が戻ってきた』もう一つの文化
（日本語）
上野千鶴子・趙韓恵浄（二〇〇四）『ことばは届くか――韓日フェミニスト往復書簡』岩波書店
エドワード・W・サイード（一九九三）『オリエンタリズム（上・下）』平凡社ライブラリー
福島みのり（二〇一〇）「韓国青年失業問題に関する一考察―社会的企業で働く二〇代を中心に」（『Waseda Global Forum 六』三二五－三四二）
福島みのり（二〇一四）『現代韓国を知るための六〇章』明石書店
＜関連ホームページ＞
ハジャセンター青少年未来進路センター：하자센터 - 서울시립청소년미래진로센터（haja.net）
Noridan – we play,imagine and create：노리단 noridan inc,
ミンドゥルレ出版社：일하며 논다、배운다：민들레 출판사／전체 도서（mindle.org）
ソンミサン学校：https://sungmisan.modoo.at
社会的企業「オヨリアシア」：https://oyori.asia/
社会的企業「トラベラーズマップ」：https://travelersmap.co.kr/main/main.html